けり、とくまゐりけんぞつかうまつるべかりけりとて、ちかやかにゐ給へるに、ちいさき御木丁などもおしやられて、つねよりもはれ〳〵しければ、宮はいとはしたなしとおぼせど、はゝ宮の見給へば、例のやうにもえそむき給はず、

〔古事談三僧行〕件僧正〔禪林寺深覺〕大二條殿〔藤原教通〕御病危急之時、御腹フクル参入シテ、圍碁ヲアソバスベキ由申行之、諸人嘲之、然而テ猶強テ被申ケレバ、相構奉搔起圍碁一局アソバス間、病腦忽平癒、已以尋常、諸人爲奇云々、〔又見二續世繼一〕

〔奥州後三年記上〕眞衡〔清原〕子なきによりて、海道小太郎成衡といふものを子とせり、年いまだわかくて妻なかりければ、眞衡成衡が妻をもとむ、〔略〕〔中〕眞ひらこの女〔多氣宗基孫〕をむかへて成衡の妻とす、あたらしきよめを饗せんとて、當國隣國のそこばくの郎等ども、日ごとに事をせさす、〔略〕〔中〕出羽國の住人吉彦秀武といふ者あり、〔略〕〔中〕秀武おなじく家人のうちにもよほされて、この事をいとなむ、さま〳〵のことどもしたる中に、朱の盤に金をうづたかくつみて、目上に身づからささげて庭にあゆみいでたり、庭にひざまづきて、盤をかしらのうへにさゝげてゐたるを、眞衡護持僧にて五そうのきみといひける奈良法師と圍碁をうちいりて、やゝひさしくなりて、秀武老のちから疲てくるしくなりて、心におもふやう、われまさしき一家の者なり、果報の勝劣によりて主從のふるまひをす、さらむからに老の身をかゞめて、庭にひざまづきたるを、久しく見いれぬ、なさけなくやすからぬことなりとおもひて、金をば庭になげちらして、にはかにたちはしりて門のほかに出て、そこばくもちきたる飯酒をみな從者どもにくれて、長櫃などをばかどのまへにうちすて、きせながとりてきて、郎等どもにみな物のぐせさせて、出羽國へにげていにけり、眞衡、圍碁うちはてゝ、秀武をたづぬるに、かう〳〵してなんまかりぬるといふを聞て、眞衡おほきにいかりて、たちまちに諸郡の兵を催して秀武をせめんとす、兵雲霞のごとく集れり、